

## 教師文化の構造的病理に関する研究

——「特色ある教育」の挫折をめぐる事例検討——

A Study about Pathology of Teacher Culture

卜部 敬康\*

Hiomichi Urabe

### 【目的】

平成14年度から全国の小中学校に導入された「総合的な学習の時間」（高等学校においては平成15年度から）に代表されるように、生徒の考える力を育むことを目的とした、伝統的な教科学習の枠をこえた教育活動が推進されつつあるのが、近年の教科教育における一つの潮流である。そのほかにも、学校毎に設ける「特色ある授業科目」の新設や高等学校の総合学科に見られるような授業ないし実習科目の多様化、地域における職業体験学習など、個々の学校の特性を生かした取り組みはこの十年前後の間に飛躍的な増加を見せている。筆者がこれまでに話を聞いた校長・教頭経験者の中にも、学校が任意に設定する「学校設定科目」が近年大幅に認められやすくなったと話す人は少なくないことから、いわゆる座学を中心とした教科科目以外の教育活動を個々の学校が主体的に展開できるような制度的基盤が整いつつあることがわかる。こうした状況を反映して、生徒の自主性や主体的な考える力を育成するための教育活動は、学校行事なども含めて全国を見渡せば、目を見張る取り組みも数多く見られる。

ところが、こうした取り組みが長続きせず数年間で取りやめられたり、継続はされても当初に比べて規模が縮小されたり特色が薄められたりすることもまた、少なくない。これは筆者がこうした「特色ある教育プログラム」に積極的に携わった現職教員からしばしば耳にしたことであり、筆者自身が過去に勤めた学校で見られたことでもある。こうした事例では、特色ある教育プログラムの実施によって、実施前に比べて学校運営上特に大きな不都合が生じたわけではなかったにも関わらず、「同僚から足を引っ張られ」という体験を語る教師も存在した。また、転勤後の学校でよい成果の得られた前任校における取り組みを実践しようとすると、同僚からあまり良い反応を得られなかったという教師も存在した。また、長期間にわたって継続される場合でも、その取り組みが形骸化し、それに関与する教師が減少することも少なくな

い。

すなわち、しばしば目玉とされるような学校におけるさまざまな「新しい取り組み」は、必ずしもそれを支える安定した環境のもとで育まれるのではなく、むしろそれを挫折に向かわせる圧力に恒常的にさらされていると見るべきであろう。その「圧力」は教師集団に内在するものであるから、筆者らがすでに指摘した教師文化の一部（林・長谷川・ト部，2000）であると考えるのが自然である。そうだとすれば、「特色ある教育プログラム」による教育効果を議論して周知するだけでは、教科書を「惰性でこなす」ことを前提とした教師文化の影響によって、長期的な実践が困難になりやすい。逆に言えば、教師集団が伝統的に有する教師文化の構造、すなわち生徒に「学習の型」を一方向的に示して守らせるという教育方法を推進することを前提とした教師文化の構造が変化しない限り、従来とは異なった教育観に立つ取り組みが成功する可能性はきわめて低いといえる。つまり、「特色ある教育プログラム」が長期にわたって成功するためには、その前提として、一部の教師が提案するユニークな試みを歓迎し、それを促進するような教師文化の再構築が不可欠となるのである。

そこで、本研究においては、ある中学校において数年間だけ実施された「新しい取り組み」<sup>1)</sup>をとりあげ、その発展と挫折の過程についての記録と、それに深く関わった教師へのインタビューを行い、その学校における「新しい取り組み」を促進した要因と阻害した要因とを抽出する。そして、筆者のこれまでに収集した教師文化についての資料と関連させて、学校における独自性の高い教育実践が長期的に継続することが困難な理由を考察するとともに、長期的に継続させるために何が必要であるかについて、試論を展開することを目的とする。

## 【方法】

本研究のために新しく収集したのは、福岡県のある中学校（以下、X中学校）で数年前に実施された学校行事の記録とその中心的な担当教師（以下、A教諭）への聞き取り調査であり、これが本稿の考察の中心となる。この教師への聞き取り調査は、2006年11月と2007年2月および3月に行い、この学校行事の企画・運営に際しての教師集団の様子と、取りやめに向かった原因として感じていることなどを詳細に聞いた。

この聞き取り調査に加えて、過去に行った次の調査も今回の分析に加えた。なお、①以外は異なった学校における取り組みである。

- ①この行事が実施された当時に収集された資料と当日の観察。
- ②総合学科のある学校の取り組みの変化についての実践記録。
- ③学校設定科目の主担当者の退任後に見られた取り組みの変化
- ④以上のプログラムを実際に受講した生徒（当時）に対する聞き取り調査記録。

## 【結果と考察】

### 1. X中学校の取り組みの内容

X中学校では、「総合的学習の時間」の取り組みとして、学校挙げての「一日商店」を開店するという試みを数年間にわたって行った。これは生徒が「自分たちで『お店』を作って、予算案（作成：筆者補足）、仕入れ、物作り、販売、決算報告などを行う商業体験活動」（資料より抜粋）であった。「総合的学習の時間」の実施時間を年度内に配分し、その中で生徒たち自身の手によって1日限りの模擬店を開き、決算報告と成果発表までを行うものである。生徒たちは5月頃より準備を開始し、各グループで出店計画を立て、校区内の商店に出向いて必要なノウハウを聞き取りに行く。計画が一段落すると、商品の作成またはその準備と広告を作成する。校区内の商店や公共施設にポスターやパンフレットを配布するためのお願いも生徒たちによって行われる。11月の出店当日が通常の学校行事でいえば文化祭にあたり、一般に開放して主に校区内の住民を対象に商売を行う。生徒たちは自分の所属するグループの店を運営しながら他のグループの生徒たちによる店を客として利用する。その後、決算報告と成果発表までを生徒たち自身が行う。この間、教師は校区内にある商店主に生徒を対象とした講話や助言を要請するなど、裏方に徹する。ある年の年間の推移を図1に示す。

この科目を主として担当したA教師によれば、この取り組みは生徒たちの主観的水準ではあくまでも「最初から最後まで自分たちでつくりあげた」という体験になることを目指して行われたので、教師が主導しないようにするための教師への働きかけと議論に多くの力を注いだという。具体的には、生徒たちのアイデアを引き出すためにプレーンストーミングを行い出された意見をまとめるのにKJ法を用いるなど、生徒たちの取り組みを円滑にすすめるための支援を行うが、「〇〇をきなさい」とか「××の方がやりやすい」というような誘導は極力しないように心がけたという。教師たちからは、準備前の段階から生徒たちの力量を不安視する声や教育効果を疑問視する意見が少なくなかったが、職員会議

5月××日	①	がびダンス	… 体育館で全員に投げかけ(OHP使用)
	①	クラスごとに	… アイデア集のヒ分類
6月××日		お店の決定	… この時点で、25種類のお店
		メンバー決定	… 19種類(26店舗)同時に決め残る店決定
××日	①	初顔合わせ	… 各お店ごとに「企画書」作り
××日		企画書研習	… 一応全部そろいはした
7月××日	②	予算編成会議	… 体育館で(予算削減合戦)
××日	①	取り組み開始	… それぞれの活動
8月××日		企画会議	… 午前中(学校)これからの流れ
9月××日	①		
××日	②		
10月××日	①		
××日	②	〇〇商店延長	
××日	②		
××日	②		
11月××日	②		
××日	②	決算報告書説明	
××日	③	準備準備	
××日	④	本番と片づけ	
××日	①	まとめ	… 各お店ごとのまとめ
××日	②	まとめ	… 体育館で全体のまとめ
I 32時間			

図1：日程表

職業総合学習

※○◎□ / ×△

課題「調理」をどのように進めようか

【問題1】結果は、おもしろいけど？  
【問題2】自分たちで探して、結果を説明する練習です  
【問題3】「食生活」が得意な人は、説明がもっと上手

（食生活の調査表見本）

◎何をやるのか  
何をするのか（もういっしょには？ 実習計画？）

◎1ヶ月間をどう使うのか  
→ 各研修の担当の研修内容を記す

3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	----	----

◎学習意欲の育成  
何にどれくらい力がかかるのか？  
おそれないか？

◎その他（何かあれば）

□目指してみたい目標□ □習ってみたい能力□

- ・習得や実習
- ・知識的な学習
- ・情報収集的な学習
- ・自主調べ、自主の、習得
- ・実習や実践
- ・地域の学習
- ・学ぶ楽しさや主体的に学ぶ力
- ・知的関心や探究心
- ・積極的に考えたり
- ・成果を主体的に発表し、評価する力
- ・自分の考えや判断に自信する力
- ・問題を発見し解決する力

※このすべてを習得し入れるのではあきません。結果もよい、結果も悪い、両方、  
※各研修の担当を大事に！

図2：「総合的な学習」へ向けての職員研修の資料の例

や研修で事あるごとにこの取り組みのねらいを説明するために資料を配布して説明を重ねたということである。また、通常の教育活動では目標とそのための活動が明確であるのに対して、この取り組みではすすめるにつれて予期しなかったことや見通しの不明確なことが生じるが、そうした「曖昧な状況を積極的に肯定」し、生徒たちが何をしてもよいかかわらずに迷うだけでなく、「教師自身何をすればよいかかわからないことがあることを教師がまず自覚することが大切」ということをA教諭は強調したという。

そのためにA教諭は担当教師たちに対して、①最初から最後まで全体の流れを提示するとともに、②柔軟な変更可能性を示唆し、③教師はあくまでも「お手伝い」であることを強調しながら、生徒たちには「自分たちでつくりあげる」ことを語りかけた。これは実施年度のA教

職業総合学習

「調理」のなまえ（例）

研修の観点	研修の観点	研修の観点
1 調理現場と学習環境	A 先生	3年1組
2 本、備本、小紙、調理作り	B 先生	備 命 組
3 既習内容やスポーツゲーム	A C 先生 D 先生 E 先生	各 科 組
6 既習作り（戻りもの）	F 先生	1年4組
7 グッピーなどの生き物飼育	G 先生	2年5組
8 調理の物を加工	H 先生	1年1組
9 クッキーなどの調理作り	A I 先生 J 先生 K 先生	各 科 組
10 写真の撮影	L 先生	各 科 組
11 備み物、例しゅうなどの準備	M 先生	2年4組
13 予備編成、57、149、宣伝、備	N 先生	2年1組
15 八百屋	O 先生	初 年 組
16 古着などを洗い出してリサイクル	P 先生	1年2組
18 古本のリサイクル	Q 先生	1年3組
19 備きそば	A R 先生 S 先生	2年2組 2年2組
20 餅、お餅、イラスト作り	T 先生	3年4組
22 カレー屋	A U 先生 V 先生	2年3組 2年3組
23 かつお節などの調理作り	A W 先生 X 先生	3年3組 3年3組
24 クイズやパズル作成	Y 先生	3年2組

図3：準備された模擬店の一覧

論と生徒との関わりからもわかったことであり、またA教諭が用意した資料からも一貫して読み取れる。図2はその一部であるが、ここにも上の3点が強調されている。このようなA教諭をはじめとした担当教師たちの積極的な働きかけによって、図3に示すように多くの企画が当日に向けて準備・実行され、生徒と教師の双方から「やってよかった」といわれるような形で取り組みを終えることができたという。

## 2. 「特色ある教育プログラム」と生徒指導との関連

X中学校における取り組みは「総合的学習の時間」における模擬店運営だけではなかった。この中学校ではこの取り組みの数年前にいわゆる「荒れた時期」があり、その原因と改善策への模索の中から、「子どもの自主性を伸ばす」「異年齢集団の交流」「地域に開く」という教育方針が教師集団の中で共有され、その柱となる一つの取り組みが上記に示した総合学習であった。従って、X中学校ではそれに並行して生徒指導上のさまざまな方針転換がなされていた。その一つが、制服の廃止・私服化であった。これは、制服を廃止することによって、服装の規律を生徒自身に委ねることを目的としたものであった。スカート丈や靴下の色といった制服の着用の仕方についての一定のルールを定め、その逸脱を取り締まることを中心とした「服装指導」や髪型や髪の色を問題とする「頭髪指導」は、多くの中学校・高等学校で生徒指導の中心となっている（林・長谷川・ト部、2000）。そうした生徒指導の現状を考えれば、X中学校はこの時期に生徒指導の基本的な考え方を革新したものと思われる。実際に、多くの学校における始業前の校門では、校則違反の服装や頭髪で登校した生徒への注意がなされることが大半であるが、X中学校では、まず、生徒の顔を見て「にこやかに挨拶をする」ということが、A教諭の呼びかけでなされていた。外的な基準で一律に生徒を一定の枠におさめるのではなく、生徒の自主性を発揮できる場を学校に作り、教師はそのきっかけを引き出す役割に徹しようというのが、生徒指導の基本方針であったという。従って、制服の廃止をはじめとした教師集団の生徒への働きかけの変化は生徒の自主性を重視するという、生徒指導観の変化の現れであり、「総合的学習の時間」の取り組みはその自主性の発揮の場として用意されたカリキュラムとして位置づけられていたと思われる。

教科教育における伝統的な教育観を覆した新しい取り組みを行う学校が、生徒指導においても特徴的な内容ないし方法を展開することは、このX中学校に限ったことではなく、しばしば見受けられることである。筆者がこれまでに資料収集した幾つかの学校に限られることではあるが、多様な選択授業を開講する学校や校外における学習活動に積極的な学校には、しばしば服装や頭髪の指導を重視しないという学校が見られる。その反対に、服装・頭髪指導と校門前の遅刻指導といった、旧来型の生徒指導が盛んな学校では、教科教育における独自性の強い新しい取り組みを見ることは少ない。これらを合わせて考えると、旧来型の生徒指導を積極的に展開する教師集団を支える教師文化の下では、教科教育における独自性の高い新しい取り組みを生み出しにくいものと思われる。

X中学校のその後の動きは、上の仮説を支持するものであった。総合学習における取り組み

は、A教諭や当時の管理職等の異動などといった事情も重なり、数年間で終わることになったのであるが、それとはほぼ同じ時期に制服復活に向けた議論が始まり、徐々にオーソドックスな生徒指導が展開されていったのだという。その理由としてA教諭の耳に入ってきたことは、「最近生徒の規律が乱れてきたから」というものであり、その原因として生徒の自主性に委ねすぎた授業運営が挙げられたという。X中学校の場合、新しい取り組みの以前に生徒が大きく「荒れ」た過去があることから、「生徒の規律が乱れつつあること」の原因を新しい取り組みに帰属させることそれ自体に正当性は乏しい。従って、盲目的に旧来型の生徒指導法を正しいと考える信念体系が教師集団にはしばしば共有されており、何らかの指導上の困難に直面するとこれに依存しやすい体質が存在するものと思われる。そして、こうした信念体系を共有することが一般的な教師文化の一部となっているので、意図的にある特定の取り組みを強く意識した教師集団でない限りは、旧来型の生徒指導と教科教育の枠組みとは異なった教育活動を長く継続することは非常に困難なことなのである。こうした理由で特色ある取り組みが長期間継続しなかったり、その特色が弱められたりした例は、X中学校に限らない。総合学科として多様な選択授業を開講し、多くの外部講師を招いたものの、講義内容に対する問題点ではなく生徒の出席回数の把握が困難になるという理由で担当講師や開講形式が（従来の講義に近い方向に）変更されることも少なくない。多様な選択授業の開講は、そもそも既存の学校では果たしえない教育内容の実現を目指して導入されたものであり、従来の学校文化とは多少異なった文化の学校への流入は止むを得ないという認識で始められたはずである。その点に関して教師集団の十分な合意が存在しなければ、いかなる学校独自の特色ある教育プログラムも、長続きしないか、形骸化するかの道を辿ることになることが考えられるのである。

### 3. むすび：「特色ある教育プログラム」の導入に必要なこと

ここまでの結果と考察から、学校独自の教育プログラムの実践にあたっては、それを阻害する要因が「取り組みの中身」やそれに取り組んだ「生徒たちの成果」にではなく、「教師文化」の構造に存在する可能性が強いことが示唆された<sup>2)</sup>。そうだとすれば、学校が独自性の強い「新しい取り組み」を継続的に行っていくためには、それに先立って、従来の生徒指導や教科教育のあり方に親和的な教師文化の構造を変化させるという作業から始める必要があるものと思われる。そのためには、どのような教育プログラムを実施すべきかということを考えるだけでなく、従来の生徒指導や教科教育のもつ成果と問題点を相対的に論ずる風土を教師文化の一部に根付かせていく活動が必要であると思われる<sup>3)</sup>。

付記：本稿は、2006年度奈良大学研究助成「教師文化の構造的病理に関する研究」を受けて行った研究の一部である。記して感謝したい。

### 【注】

- 1) 取り組みの具体的な名称や詳細な実施時期については、担当者名などの特定を避けるため掲載しない。
- 2) いわゆる「オーソドックスな指導法」から逸脱した教育実践は長く続かない、という事実だけに着目すれば、マクロな教育政策の水準としての「ゆとり教育の見直し」もその典型例と位置づけることができる。「ゆとり教育」は従来の学力評価で測定できない「総合的な生きる力」を育成する目的で導入されたが、従来の学力評価で測定された「学力低下傾向」を理由として見直されることになった。その意味で、ここで挙げた例と同じく本末転倒である。
- 3) 筆者は昨年度の所報において、スクールカウンセラー制度の問題点として教師文化を維持する方向に作用していることを挙げた。この点で、本稿は昨年度のテーマと同一の問題意識のもとに書かれたものである。

### 【引用文献】

林理・長谷川太一・卜部敬康（編） 2000『職員室の社会心理：学校をとりまく世間体の構造』（ナカニシヤ出版）